

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2872800301		
法人名	社会福祉法人 日の出福祉会		
事業所名	グループホーム琴音 (やすらぎ)		
所在地	兵庫県加古郡稲美町国安1256番地		
自己評価作成日	平成23年9月9日	評価結果市町村受理日	平成23年11月2日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2872800301&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 姫路市介護サービス第三者評価機構		
所在地	姫路市安田三丁目1番地 姫路市自治福祉会館6階		
訪問調査日	平成23年10月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者が普通の暮らしができる支援を実践しています。利用者が安心して暮らせる環境作りとして家族会の発足から一年五ヶ月が経過しました。現在、利用者様、家族様との絆、スタッフとの信頼関係を深めていくことで、お互いの思い、気持ちを言い合える関係が構築しつつあります。利用者様がはっきり、しっかり自己主張を訴える事ができる環境にあり、日々、個々に充実した暮らしが出来るよう努力しています。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホーム琴音」憲章5ヶ条を地域密着型サービス事業所独自の理念とし実践に努めている。形だけでなく徹底して人権尊厳のケアが行われている。利用者一人ひとりのプライドを大切に、言いたいことが言える雰囲気づくり、短期記憶の障害を支え普通の生活を継続し終末期の看取りも含め、人間として当たり前に一緒に暮らしたいとの職員全員の目標が定まっている。ホーム長の熱意で家族会立ち上げ、一泊旅行、地域連携と理想を現実化されている。利用者・家族・職員の信頼関係が良好であり、とことん現場主義のケアにさらに期待が持てる。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに 印	項目	取り組みの成果 該当するものに 印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果 やすらぎ

(セル内の改行は、(Alt+Enter)です。)

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型サービスの理念として、事業所独自で「グループホーム琴音」憲章の5か条を作り、その理念を共有し、毎日のミーティング時、理念を唱和し実践に繋がるよう努めている。	事業所独自の理念を職員皆で造り上げて玄関に掲示し、毎日のミーティングでも唱和して、日々のケアに活かすように努めている。管理者は、会議の中で職員に地域密着型サービスの役割を確認し、具体的な実践に繋がるように努めている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会主催の清掃等に利用者、スタッフ参加、運営推進会議出席への働きかけを行い、8月の会議から出席可能となり、地域へ持ち帰り情報を伝えてくれる環境にしていきたい。	自治会に加入し、職員と利用者は年1回、事業所前の琴池の清掃活動に参加している。「琴池を守る会」主催の清掃活動にも年3回参加している。地域関係者との連携を進めていくために、社会福祉協議会を通じての小中学校との交流、民生委員の運営推進会議への出席実現を目指している。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	老人大学での講師として講義の継続、介護教室、社協が立ち上げた家族会からの見学者への説明、見学、入居希望時の相談を含め、積極的に地域の人々に向けた貢献に努めている。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月毎に運営推進会議を開き、取り組み状況、事例などを通話し合いを行い、開かれた会議に努め、サービスの質を高める努力をしている。主任、リーダーを参加させ、直接意見、状況を確認させサービス向上に繋げるよう活かしている。	2カ月に1回、定期的開催されている。運営状況、ご利用者の相談事例の報告・検討、介護事業計画についての行政からの報告、出席者からの質問・意見等があり、双方向の会議になっている。出席者は、利用者家族、市町担当者、自治会会長、地域ボランティア、有識者、社会福祉協議会職員、事業所側と多様である。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の中でも利用者の事例を通し、ケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、介護関係の情報が住民に届いているか等の情報交換を行い協力関係を築けるよう努力している。	市町担当者が、運営推進会議には必ず出席されていることもあり、情報共有するなど積極的に連携構築に努めている。会議以外にも、月に数回、市町担当者窓口を訪れて実情やケアサービスの取り組み状況を伝えている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	基本的に施錠をせず、自由に出入りができるように取り組んでいる。会議の中でも話し合いの場を設け、外出する際は付添い、その方に合った対応を行っている。	管理者・職員の努力により日中、玄関の施錠をしないケアの取り組みが定着している。帰宅願望のご利用者に対して、人権と尊厳を大切に抑圧感を招かない支援に努めている。管理者は会議の中で、職員に身体拘束の弊害と身体拘束をしないケアの取り組みを指導している。	
7	(6)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃、個々の接し方について、注意を払うよう指導したり、ミーティングの際は、今日の予定の中で関わり方を伝え、実践するようにしている。ゆとりのある支援を心掛け、防止に繋げている。	管理者は、利用者との関わり方にゆとりを持ったケアの実践を職員に指導している。日々のミーティングで、その日の予定の中での利用者との関わり方を伝えている。また、職員の仕事時間と休み時間に緩急をつけるようにし、疲労・ストレスが生じないように努めている。	管理者は、毎日、職員といる同じ職場の中や会議の中で、虐待の防止を徹底するべく職員を指導されているが、職員が「高齢者虐待防止関連法」について学び、基本的知識を身に着ける取り組みを望む。

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、後見人制度を利用しているケースがあり、学ぶ機会を持っている。	利用者の中で、現在、成年後見制度を活用している事例があり、事業所として学ぶ機会を持っている。ただ、職員全員が、これらの制度について利用者家族から求められた時に、情報提供や必要な支援ができるところまでには至っていない。	「成年後見制度」、「日常生活自立支援事業」について学ぶ機会を持ち、基本的な知識を得て、利用者に情報提供し、支援できるよう今後の取り組みに期待したい。
9	(8)	契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族の不安の軽減に努めるべき、説明を十分行い、事前の体験をする事で少しでも安心に繋げるよう努めている。又関係者で、本人、家族にとっていくつかの選択肢から相談を重ね、安心のできる理解、納得を図れるように努めている。	不安を取り除くため、入居前に、利用者と家族等と一緒に昼間1日事業所に居る事前体験をしていただき、入居者の顔を知ってもらっている。契約時は、利用者宅を訪問し、家の様子等を見せてもらい、重要事項説明を時間をかけて丁寧に行い、理解・納得の上で契約している。	
10	(9)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的に家族会を開き意見交換の場を設けている。意見交換の中で、職員の名前が覚え難く、呈示の希望があり、玄関に担当者、利用者の写真を掲げている。	利用者家族との信頼関係構築のため、昨年3月、ほぼ全家族出席の上で家族会を発足させ、6月に第1回の家族会を開催することができた。ほぼ2カ月に1回定期的に、家族会を開催している。10/1～2にグリーンピア三木に利用者全員、家族、職員全員の合計42名での1泊旅行を実施し、予想以上に連携を深めた。	
11	(10)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	半年毎の面談の中で、要望、意見を聞く機会を設けている。反映できるように努力している。	事業所では、年2回の職員に対する自己評価申告と面談を通じて、日々の努力や実績を把握し、処遇に反映している。また、面談の中で職員の意見、要望等を聴き、反映するようにされている。日々のミーティング、会議の中でも意見・提案が率直に出されている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	一年に2回考課表による評価、面談を行う。日々の努力や実績、勤務状況を把握し、個々の向上心を持って働けるよう職場環境、給与水準の条件の整備に努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	一年間の計画の中で、個々に合った研修を受ける機会を確保し、毎月の会議の中で研修報告を行い、皆で取り組みをしている。日々のミーティングの中でもトレーニングをしている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	機会があれば自由に交流する環境にあります。地域ネットワーク会議の参加		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	特に今までの生活習慣等の情報収集を密に行い、継続して出来る事は積極的に行い安心に繋げる様にしている。本人、家族に琴音で他の利用者、スタッフとの顔あわせ自己紹介等を行い、少しでも安心を確保できるように努めている。		
16			初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	十分な聞き取りを行い、密に連絡し関係作りに努めている。初期は特に、密な家族来所をお願いしており、家族と共に支援にあたるようにしている。		
17			初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者個々の、必要としている支援を見極める事は大切。ショート利用時の車イスから、入居時に老人車で対応し、亡くなるまで老人車で自力歩行できたケースもある。		
18			本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その方の生き方を共有し、家事全般暮らしの中で教え教えられる活きた生活ができるよう努力している。本音で言いあえる関係作りに努めている。		
19			本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会、毎月の近況報告の手紙を出し、誕生日行事など、常に家族と協力、支え合える関係作りに努め、家族の絆を大切にしながら、本人に安心した暮らしが築けるよう努力している。		
20	(11)		馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまで大切にしてきた関係が途切れないように、家族とも相談しながら進めている。関係の継続の中で本人にとってプラスになる事は支援に努めている。	地藏参りの習慣のある方、写経を唱える方、飲食店で外食される方、美容院にカットに行かれる方、法要のために家族と一緒にいられる方等、利用者のこれまでの馴染みの人・場所を把握して、適宜、関係性継続の支援に努めている。	
21			利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の様子を良く把握し、話しの合う人同士や、同じ地域の人同士で会話出来るよう配慮したりお互いの良い面を出し合えるような環境作りに努めている。日々の中でお互いに支え合える様に言葉で伝えている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じて相談に努め、運営推進会議、ボランティアにも参加していただき、契約終了後も関係無く良い関係を継続している。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人、家族の意向を十分に聞き、今迄の暮らしができるだけ継続して生活できるよう努めている。	利用者の中に、意思表示の分かりにくい方がおられるが、根気よく絶えず声掛けをして思いや意向を汲み取る支援に努めている。歩行困難な方であったが、本人家族両方の意向に沿って、自立支援を目指して入居初日から老人車を使用して歩行を継続することで、それが定着し、家族が感動された支援事例もある。	
24			これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今迄の生活習慣、生活歴、馴染みの関係などを十分聞き取りを行い、今の生活に反映できるように努め本人の安心に繋げるように支援している。		
25			暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今ある能力、心身の状態の把握に努め、個々の暮らしの自主性、目的のある暮らしの実現に繋げるように日々努力している。		
26	(13)		チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の意向を反映できる計画の作成、又、会議、ミーティング等でケアの見直しを行い、実践に繋げていけるようにしている。	利用者家族等の意向を丁寧に汲み取り、同意のもとで、利用者主体の暮らしを反映した介護計画を作成している。カンファレンスは職員全員で行っている。モニタリングは毎月1回行い、計画の見直しは、3カ月毎に行っている。また、変化の見える時や変更の要望がある時は、速やかに計画の見直しが行われている。	
27			個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活記録、毎朝のミーティング、会議で共有し、見直しに活かしている。		
28			一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族とも相談しながら、いつでも柔軟な対応がとれるよう日頃からその意識で取り組んでいる。		

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今迄の生活の継続、本人の力が発揮できる環境を整え、暮らしの中で楽しみに繋げていけるよう支援している。今後も本人の望む事であれば支援していきたい。		
30	(14)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医との信頼関係を重視し、本人、家族の希望を大切にしながら、往診、受診で適切な医療を受けられるよう支援している。	利用者家族等の希望する医療機関・医師を選択できるようになっており、18人中5人の利用者がかかりつけ医を利用されている。原則、家族が通院介助しているが、家族が困難な場合には、事業所が通院介助を行う。受診時の状態報告も医師、家族と共有できる体制になっている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が一週間に一度、バイタル測定を行う。いつでもドクターとも相談できる環境を整えている。緊急時も連携体制があり適切な受診、看護を受けられるよう支援している。		
32	(15)	入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時は家族との連携、状態確認などを密に行い、家族、医療関係者との情報交換や相談に努めている。早期に入退院できたケースは今までも数名あり、家族が喜ばれた。	入退院時に、事業所は、利用者家族等と協働しながら医療機関と密接な連携を取り、利用者に関する情報提供を行い、退院時カンファレンスに立ち会うなどの支援に努めている。入院中は職員が見舞いに行っている。退院後の暮らしに向け、入院中に寝たきりにならないよう歩行能力が維持できるような支援もされている。	
33	(16)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階から予測できる事を家族などと話し合いを行い、十分に説明をしながら納得のできる支援に取り組んでいる。家族と協力のもと、琴音で看取る事ができた。	事業所内で、重度化や終末期に向けた方針が確立されており、共有されている。また、入居当初の段階からできることについて利用者家族に説明しており、時期に応じた説明もされている。昨年12月から今年2月にかけて2件の看取りを経験され、利用者家族、職員にも安心と信頼を与え、一体感が増している。職員のターミナルケア研修派遣も推し進めている。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急連絡網の作成、事故発生時の対応を含め、会議などで実践力を身につけられるように努めている。		
35	(17)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年4回の訓練を行っている。総合訓練、夜間想定新職員には消火器を使っての訓練も行う。	併設の稲美苑と一緒に消防訓練を含めて、年4回夜間及び昼間を想定した避難訓練を行い、消火器使用の訓練も念入りに行っている。また、運営推進会議を通じて地域関係者に協力要請もされている。	いつ、どんな想定外の災害が発生するかの予測は不可能といえる。地震・水害等、他の災害対策についてもシミュレーションを行うなどして取り組んでほしい。既にされている備蓄についても、改めて内容・数の見直しを図ってほしい。

自己	者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の尊厳を重視した対応に、常に気配りし対応に努めている。	一人ひとりの人権と尊厳を大切にした支援が行われている。出来ていると思っている自尊心を傷つけないようさりげなく対応したり、声掛けして自力で動作するように促し、そっと見守るなどして丁寧に支援している。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の暮らしの中で、自己主張できる環境に置き自由、活発に話ができる雰囲気にも努めている。継続することで、かなり活発に自己主張を言える暮らしに繋がっている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々の生活が、個々のペースに合わせた暮らしになるように努めている。業務を優先しないよう、日々のミーティングの中で、個人に接する予定を発表するようにして、希望に添えるようにしている。意識の統一が出来てきている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	いつでもおしゃれを楽しめるような支援に心掛けている。その日の利用者の洋服を皆で褒めるようにすることで、利用者のおしゃれ意識が強まっている。		
40	(19)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りもその人に合った部分の手伝いをお願いしながら、昔話などの会話を楽しみつつ一緒に片付けをしている。調理員が週3日加わり変化があった。料理への興味を言われたり、一つ楽しみが増え言葉に出されるようになってきている。	食事作りに調理員が加わる日と職員が加わる日があり、利用者はそれぞれの力に応じて役割を担い、買物、下ごしらえ、盛り付け、配膳、後片付けなどを調理員・職員と一緒にやっている。利用者家族と一緒に種蒔きして収穫した新鮮な野菜が食卓に上り、利用者と職員が同じ食卓を囲んで同じものを楽しんで食べられる。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に摂取量は異なるが、水分量も1日を通じて確保できるよう、個々の状態を把握し支援している。本人の好む飲料、栄養のバランスを考えた食事作りに努めている。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々に応じて食後、口腔清潔を保てるよう支援している。		

自己	者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限り自立での排泄ができるよう、工夫し対応している。失禁はあっても着替えを準備しておくことで着替える。直ぐに片づけておくことで本人は失禁した事は忘れていて、自尊心を傷つけない生活意欲に繋がり自立した支援を行っている。	ライフチャート(バイタル、排泄チェック、水分摂取の個人記録表)を基に、一人ひとりの排泄リズムを把握し、自尊心を尊重しながら個々に応じた支援をしている。以前はオムツをしていた方がおられたが、現在はおられない。紙パンツ・パッド使用から布パンツに改善した事例が3件ある。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	飲植物の工夫や運動を勧めるなど、昼間は身体を動かす事を働きかけ、個々に応じた予防に取り組み継続している。		
45	(21)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴を嫌がる方にも好きな音楽をかけ気持ち上げていく等の工夫をしたり、希望やタイミングを見る、家族が付き添うなど個々に添った支援をしている。	基本的に利用者一人ひとりの希望に沿った入浴支援が行われている。入浴を嫌がる方に、好きな音楽をかけて気持ちを上げてから、タイミングを見計らって入浴していただく支援例もある。また、菖蒲湯、柚子湯などの季節湯を楽しんでいただいている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	出来る限り、日中は身体を動かしていく。集中できること、楽しむ、状況に応じて支援をしている。夜は安眠できるように日中の暮らしの充実を図っている。		
47		服薬支援 一人ひとり使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬、副作用、用法など、皆が理解し支援できるよう連携に配慮している。記録、ミーティング、連絡帳等で確認に努めている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事全般の中での役割り、個々の楽しみごと(カラオケ、歌、喫茶、ゲーム、クイズ、畑、俳句、毛筆、メニュー書き、ちぎり絵)各階へ自由に入出入りして、お互いの利用者との気分転換を図る支援をしている。		
49	(22)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	月に一回外食したり、服を買いに行ったり、外泊など、家族との協力をしながら出かけられる様に支援を継続している。	一人ひとりの希望に沿い、事業所前の琴池を散歩したり、畑に行ったり、近くの洋品店に買物に行ったり、喫茶店・花見に行ったりして外出の支援をされている。10/1～11は、全利用者、ご家族、職員全員と一緒にグリーンピア三木で一泊の遠出をして、楽しいひと時を持った。毎日曜日に、隣接の稲美苑に出掛けて行き、カラオケを楽しむ方もおられる。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個々に応じて管理できるかたはお金を所持し、いつでも使えるように支援している。本人が店に行き好きな服を選び購入する。食べたい物の希望を聞き、一緒に出掛け購入したり、本人が使えるように支援している。		
51			電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望により、いつでも対応できるようにしている。携帯電話を持ち息子さんからの電話に直接話せるように支援している。		
52	(23)		居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には観葉植物、庭、ウッドデッキに草花を植え室内からも見えるようにしたり、テーブル、椅子を設置し、いつでも、どこでも利用できるよう配慮している。和室もあり居心地良く過ごせるような工夫をしている。	玄関・居間は広くゆったりとしており、落ち着きがある。音・光・温度も申し分なく、壁には、利用者家族と職員が行事を楽しむ写真や利用者の俳句や貼り絵などの作品が貼られて、訪れる人の目を誘う。また、居間には、観葉植物、生け花が飾られ、大きな掃出し窓の外側にある庭には、季節の花が咲き、見ている人を和ませしてくれる。	
53			共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の中で、和室で一人で過したり、気の合った者同士でソファーに座ったり、ひだまりで過す、庭のテーブルで食事するなど、思い思いに過ごせるよう工夫している。		
54	(24)		居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	今迄使われていた物、使い慣れた物や好みの物を、本人、家族と相談しながら居心地良く過ごせるよう工夫している。	利用者に馴染みがあり、思い出のあるベッド、タンス、仏壇、写真、絵などが持ち込まれて、それぞれに合った居場所づくりがされており、利用者が居心地よく過ごせる居室づくりの配慮がされていることが窺われる。	
55			一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所が分かるように張り紙をしたり、入浴時、手摺りを持つ事で浴槽が跨げる、歩行器、老人車などがあれば歩行ができる。自身の洗濯物を干したりできる環境にし、自立した生活が送れる工夫をしている。		